

ジョン・ケージ作品の指導：  
中学校音楽科授業における現代音楽の展望

森下修次，吉村智宏，和田麻友美，菊地雅樹

Teaching John Cage's works: some perspectives on a class music education by  
Contemporary music in a junior high school

Shuji MORISHITA, Tomohiro YOSHIMURA,  
Ayumi WADA, Masaki KIKUCHI

新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要  
教育実践総合研究  
第6号 2007年 別刷

Bulletin of  
Center for Educational Research and Practice  
Faculty of Education and Human Sciences, Niigata University  
No. 6 2007



# ジョン・ケージ作品の指導：中学校音楽科授業における現代音楽の展望

森下修次\*1、吉村智宏\*2、和田麻友美\*2、菊地雅樹\*3

## Teaching John Cage's works:

some perspectives on a class music education by Contemporary music in a junior high school

Shuji MORISHITA、Tomohiro YOSHIMURA、Ayumi WADA、Masaki KIKUCHI

### 1. はじめに

近年、日本の小・中学校における音楽において問われているのが「音楽の学びとは何か」である。国語、社会、理数等の教科では何を学ぶのか比較的是っきりしているが、それ以外の教科、特に音楽において何を学ぶのか、何が学びなのか統一した見解がもてないのが現状である。

音楽における「学び」が曖昧なのは、ひとつは音楽の目的が音を楽しむ、音楽の目的は楽しむこと、人と人とのコミュニケーション、といったような、音楽学習における副次的効果が目的化してしまったためと考えられる。

また、音楽は多岐にわたる様々な要素から成り立っている。音の組み合わせは音楽を生んだが、その構造は種類が多く複雑である。我々の脳は複雑な諸要素からなる音楽の一つのこととして総合的にとらえていると考えられるが、そのことが音楽の「何」を学ばないといけないのかという問を難しくしている。

我々は音楽の学びへの糸口として、ジョン・ケージの音楽を選んだ。

ジョン・ケージの音楽は現代の我々と共に歩んできた音楽の一つである。現代音楽の作曲家の中でも比較的よく知られており、独特の作風や、生涯を通して音楽に対して真摯に取り組んでいるという彼自身の生き様に対し、子どもたちが興味をもつのではないかと考えた。また、我々と同時代の彼の作品を学ぶことは、我々の置かれている社会や環境の音楽を学ぶことであり、さらに、ケージの音楽に対する考え方やその作品に触れることが、「子どもたちが考えている“音楽”への認識の幅を広げる」ことにつながるのではないかと考えた。

今回作成する教材によって、生徒たちが今まで音楽と考えてもいなかった作品に触れることで、音楽に対する認識を考え直すきっかけになればと考え、教材開発と検証のための授業実践を行った。

### 2. 授業実践

授業は表1の指導案を元に行なった。授業の様子を図1、図2の写真に示す。その際使用した学習プリント（記入例）を図3に示す。



図1 授業の様子



図2 授業の様子

※1 新潟大学教育人間科学部

※2 新潟大学大学院教育研究科

※3 新潟大学教育人間科学部附属長岡中学校

表1 指導案

## 2年2組音楽科学習指導案

平成18年11月21日(火) 第1限  
第2学年2組(40名)指導者:新潟大学教育学研究科2年  
吉村 智宏, 和田 麻友美, 全 鋒

## 1. 題材 「私が考える音楽」

## 2. 題材設定の理由

音楽の授業で取り扱われている音楽の大部分は、作曲家によって五線譜上に音楽が示されている作品である。そのため、「音楽は、作曲家によって五線譜上に書かれたもの」としてとても狭い枠組みの中で音楽を認識している生徒も中にはいる。しかし、実際には五線譜を用いずに音楽を示している作品や、作曲家はおおよそその形を示すだけで、あとは演奏者に任せてしまうような作品など、この世には様々な音楽の形態が存在するのである。

そこで、今回の授業を通して、そのような様々な形態の音楽に触れる機会を得、生徒の持つ音楽についての認識の枠を広げられるようにしたいと考えた為、このような題材設定を行った。

## 3. 目標

- (1) ジョン・ケージの音楽に対する姿勢や、その音楽作品に興味を持ち、生徒ひとりひとりが音楽に対しを積極的に思考することができる。  
(音楽への関心・意欲・態度)
- (2) ジョン・ケージの音楽表現の斬新さを感じ取り、その面白さを自分なりに言葉で表現できる。  
(音楽的な感受と表現の工夫)
- (3) ジョン・ケージの音楽に対する姿勢を知ることによって、「私が考える音楽」を深めることができる。  
(鑑賞の能力)

## 4. 教材

①「ジョン・ケージの音楽」(大学院「教材開発研究」の一環で作成した冊子、音源、映像を含む。)

## ②学習プリント

- ・ ディベート時の「私が考える音楽」について
- ・ 最終的な「私が考える音楽」について

## 5. 授業の構成(全1時間)

|          | 内容・留意点  |
|----------|---|
| 1時間<br>目 | <p><b>【1. 4分33秒を聴いてみよう】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 教師による『4分33秒』を聴く。</li> </ul> <p><b>【2. 『4分33秒』は音楽か否か】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学級を半数に分け肯定派・否定派にわかれてディベートを行う。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学習プリントの1に自分の意見を論拠を明確にして記入する。</li> <li>・ 肯定派・否定派のそれぞれの論拠を明確にした上で、肯定・否定の討論を行う。</li> </ul> </li> </ul> <p>例)「私は〇〇だと考えるので『4分33秒』は音楽だと思う(思わない)」</p> <p><b>【3. 『4分33秒』の作曲者】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 『4分33秒』の作曲者であるジョン・ケージの意図を探る。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 製作した資料を通し、ジョン・ケージの意図を理解する。</li> <li>・ 2の活動で得た自分の考えとジョン・ケージの考えを比較する。</li> </ul> </li> </ul> <p><b>【4. ジョン・ケージの音楽】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ ジョン・ケージの作品を通して、その斬新な表現方法について理解する。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 25音音列について</li> <li>・ プリペアドピアノの作品</li> <li>・ 図形楽譜</li> </ul> </li> </ul> |

5. 授業の構成 (全1時間)

|      | 内容・留意点   |
|------|--|
| 1時間目 | <p><b>【5. 4分33秒を聴いてみよう】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 教師による『4分33秒』の「演奏」を聴く。</li> </ul> <p><b>【6. 『4分33秒』は音楽か否か】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学級を半数に分け肯定派・否定派にわかれてディベートを行う。                     <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習プリントの1に自分の意見の論拠を明確にして記入する。</li> <li>・肯定派・否定派のそれぞれの論拠を明確にした上で、肯定・否定の討論を行う。</li> </ul>                     例)「私は○○だと考えるので『4分33秒』は音楽だと思う(思わない)」                 </li> </ul> <p><b>【7. 『4分33秒』の作曲者】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 『4分33秒』の作曲者であるジョン・ケージの意図を探る。                     <ul style="list-style-type: none"> <li>・製作した資料を通し、ジョン・ケージの意図を理解する。</li> <li>・2の活動で得た自分の考えとジョン・ケージの考えを比較する。</li> </ul> </li> </ul> <p><b>【8. ジョン・ケージの音楽】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ ジョン・ケージの作品を通して、その斬新な表現方法について理解する。                     <ul style="list-style-type: none"> <li>・25音音列について ・プリペアドピアノの作品 ・図形楽譜</li> </ul> </li> </ul> <p><b>【9. 今音楽に対して思うこと】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ ジョン・ケージの創作活動を通し、「私が考える音楽」の考えを深める。                     <ul style="list-style-type: none"> <li>・「私が考える音楽」をプリント2に自由形式で記述する。</li> </ul> </li> </ul> |

6. 評価規準

|                         | ア 音楽への関心・意欲・態度   | イ 音楽的な感受や表現の工夫  | エ 鑑賞の能力   |
|-------------------------|--|---|---|
| 鑑賞                      | ○  | ○   | ○   |
| 題材の評価規準                 | ジョン・ケージの音楽に対する姿勢や、その音楽作品に興味を持ち、生徒ひとりひとりが音楽に対しを積極的に思考している。  | ジョン・ケージの音楽表現の斬新さを感じ取り、その面白さを自分なりに言葉で表現している。               | ジョン・ケージの音楽に対する姿勢を知ることによって、「私が考える音楽」を深めている。      |
| 学習活動に置ける具体的評価規準         | <b>【1. 4分33秒を聴いてみよう】</b>                                   |   |   |
|                         | <b>【2. 4分33秒は音楽か否か】</b>                                    |   |   |
|                         | ①「肯定派」「否定派」それぞれの論拠を意欲的に見出している。<br>②相手の意見に興味を持って聞く。         | ①1の活動から受けた印象をもとに、自分の考えを学習プリントの1に記述している。                   | ①1の活動を受けた印象から自分の論拠を明確にして、学習プリントの1に自分の考えを記入している。 |
|                         | <b>【3. 4分33秒の作曲者】</b>                                      |   |   |
|                         | ③ジョン・ケージが4分33秒を作った経緯に興味を持って聞いている。                          | ②ジョン・ケージの考えと2の活動での自分の考えを比較している。                           |   |
|                         | <b>【4. ジョン・ケージの音楽】</b>                                     |   |   |
|                         | ④ジョン・ケージの表現の斬新さや、音楽に興味を持って聴いている。                           |   |   |
| <b>【5. 今音楽に対して思うこと】</b> |  |   |   |
|                         | ③ジョン・ケージの音楽への考えや表現の斬新さから感じたことから、「私が考える音楽」を学習プリントの2に記入している。 | ②ジョン・ケージの音楽への考えや表現の斬新さを踏まえ、「私が考える音楽」を深めた記述を学習プリントの2にしている。 |   |

## 8. 授業の全体計画と評価の計画・方法

| ねらい・学習活動                 | 具体的<br>評価規準              | 評価のポイント  | 評価方法                           |
|--------------------------|--------------------------|--|--------------------------------|
| <b>【1. 4分33秒を聴いてみよう】</b> |                          |  |                                |
| <b>【2. 4分33秒は音楽か否か】</b>  | アー①<br>アー②<br>イー①<br>エー① | ・積極的に意見を述べている<br>・相手の意見に興味を持っている<br>・学習プリントに記述がある<br>・学習プリントの記述に論拠がある。 | 観察<br>観察<br>プリントの内容<br>プリントの内容 |
| <b>【3. 4分33秒の作曲者】</b>    | アー③<br>イー②               | ・興味を持って聞いている<br>・教材にメモなどを行っている   | 観察<br>観察                       |
| <b>【4. ジョン・ケージの音楽】</b>   | アー④                      | ・興味を持って聞いている   | 観察                             |
| <b>【5. 今音楽に対して思うこと】</b>  | イー③<br>エー②               | ・学習プリントに記述がある<br>・学習プリント1と2に違いがある                                      | プリントの内容<br>プリントの内容             |

## 9. 本時の展開

| 学習内容   | 教師の働きかけ (教材)   | 児童の活動   | 評価規準              |
|--|--|---|-------------------|
| <b>【1. 4分33秒を聴いてみよう】 (4分33秒の演奏)</b>                          |  |   |                   |
| ○4分33秒の鑑賞  | ○4分33秒を演奏する  | ○4分33秒を鑑賞する   |                   |
| <b>【2. 4分33秒は音楽か否か】 (学習プリント)</b>                             |  |   | アー①               |
| ○4分33秒は音楽であるかどうかのディベートを行う                                    | ○学習プリントを配布する。<br>○生徒の半数を無作為に「肯定派」「否定派」にわけ、ディベートをさせる。                   | ○論拠を明確にして自分の意見を学習プリントの1に記述する。<br>○自分の意見の論拠を明確にして「肯定」「否定」の意見を述べる。  | アー②<br>イー①<br>エー① |
| <b>【3. 4分33秒の作曲者】 (John Cage の音楽・4分33秒の楽譜)</b>               |  |   | アー③               |
| ○John Cage が4分33秒を創った意図を探る<br>○2の活動で得た自分の論とJohn Cageの考えを比較する | ○4分33秒の楽譜を見せる<br>○教材John Cageの音楽を配布する<br>○教材①までを黙読させる。<br>○教材①までを音読する。 | ○4分33秒の楽譜を見る<br>○John Cageの音楽の①までを黙読する<br>○教師の音読を聞く<br>○自分の論と比較する | イー②               |
| <b>【4. ジョン・ケージの音楽】 (John Cage の音楽、図形楽譜・バッカスの祭りの音源と楽譜)</b>    |  |   | アー④               |
| ○John Cageの音楽への姿勢や斬新な表現を理解する                                 | ○John Cageの音楽②～④までを説明する<br>○可能であれば図形楽譜の演奏をさせる                          | ○教師の説明を聞く<br>○(可能であれば) 図形楽譜の演奏をする                                 |                   |
| <b>【5. 今音楽に対して思うこと】</b>                                      |  |   | イー③               |
| ○学習を通し「私が考える音楽」を考え、記述する                                      | ○学習プリントの2に「私が考える音楽」を記述させる<br>○終了しだい回収する                                | ○本日の学習の内容を踏まえ、学習プリントの2に「私が考える音楽」を記述する                             | エー②               |

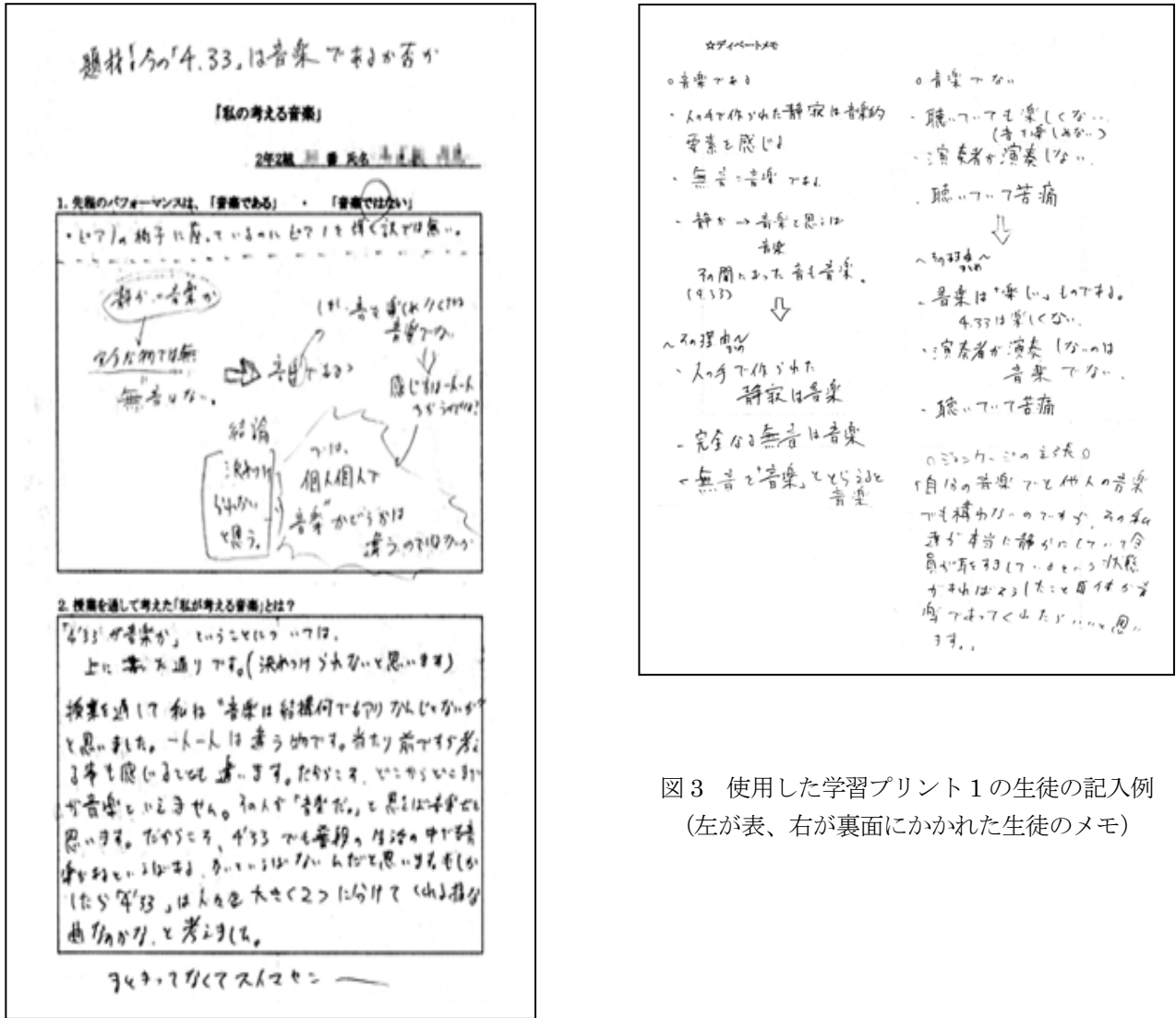


図3 使用した学習プリント1の生徒の記入例 (左が表、右が裏面にかかれた生徒のメモ)

今回授業を実施した2年2組の生徒は、これまで、歌唱表現の追究活動を通して音楽を構成する諸要素の働きについて学んだり、表現や鑑賞を通して、一つの楽曲に様々な表現の可能性があることを実感をもって学んだりし、音楽表現への認識を広げてきた。しかし、そこで扱った教材を音楽のジャンルという点から見ると、広く中学校で歌われている合唱曲、いわゆるクラシックと呼ばれる西洋音楽、そして箏曲「六段」といった日本の伝統音楽などであった。

したがって、今回取り上げるジョン・ケージの作品のような現代音楽に触れるのは、今回が初めてであり、子どもたちの「音楽」に対する認識を根本から揺さぶり、彼らにこれまであまり意識してこなかった「音楽とは何か」について考えさせ、彼らが「音楽」を改めてとらえ直すことが期待される。

### 3. 考察

生徒はどのように音楽を捉えていたか

ここでは、本授業で用いた学習プリント1の記述より生徒が音楽をどのように捉えているかを分析し、考察を行った。

#### 学習プリント1の内容

本実践の始めで、ジョン・ケージの『4分33秒』を鑑賞させた上でそれが「音楽である」と「音楽でない」というグループに生徒を機械的に分類し、その論拠を考察させ、そして討論させた。「機械的に分類」したのは、生徒の捉えている「音楽」をできるだけ客観的な視点で調査したいということと、それぞれのグループの人数を同数にすることによって討論に公平性が保てるのではないかと考えたからである。

#### 学習プリント1への記述

ここでは「音楽である」と「音楽でない」のそれぞれ

れの論拠として書かれた記述をいくつか挙げる。○「音楽である」の記述は次のとおりである。

- ・ 人の心をつかんだしずかな音、周りの音はすべて音楽
  - ・ すべて休符の曲であるので音楽である。
  - ・ 無音の空間が音楽になっていたのではないか。
  - ・ この『4分33秒』の間にあった音が音楽。
  - ・ 音というか「音がなく静かなもの」という音楽ととらえる。
  - ・ きいている人と演奏する人でつくった音楽。
  - ・ 実際には弾いていないけれど、その前の体勢を（が？）入っている。
  - ・ 聞いている側がその音楽を想像して、音楽を流せば音楽になると思います。
  - ・ 人の手で作られた静寂はもはや音であるから。
  - ・ 人が作ったものだから音楽ではないかと思えます。
  - ・ 無音を音として扱われているから。
- 「音楽でない」の記述は次である。

- ・ 音が無い
- ・ 「音楽」とは音を楽しむということだから、音がなければ音楽ではないと思う。
- ・ 演奏者が演奏しない。
- ・ 終始がわからない。
- ・ 楽しいとか、美しいとか思わないから。
- ・ 音楽とは自分たちでつくること。
- ・ 楽器の音がしない。
- ・ 『4分33秒』の間に人が動いた時の服の音がきこえたがそれはあくまで「雑音」である。
- ・ 自分にとって音楽的でなかった。
- ・ 『4分33秒』に感動や感じるものがなかった。
- ・ 演奏者が音楽を感じていない。
- ・ 聞いていて苦痛だった。
- ・ ピアノの音がない。リズムもテンポもない。

#### 記述内容の分析

さきほどの記述を整理すると、それぞれのグループは次のことを要素としていることがわかる。

- 「音楽である」
- (ア) 無音は音楽である。
  - (イ) 静寂は音楽である。
  - (ウ) 休符は音楽である。
  - (エ) 周りの音（環境音）は音楽である。
  - (オ) 人の手で作られたものは音楽である。
- 「音楽でない」
- (カ) 無音は音楽でない。

- (キ) 「音」を「楽」しんでいないものは音楽でない。
- (ク) 雑音は音楽でない。
- (ケ) 音をつくっていないので音楽でない。
- (コ) 音楽の要素がないので音楽でない。

それぞれの要素の比較

抽出された要素を集合図にすると図4のようになる。

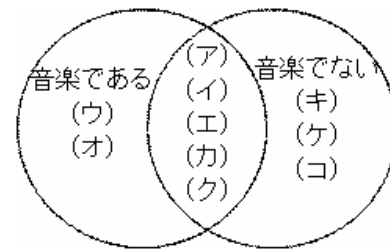


図4

このことから、生徒が音楽をどの様にとらえてきたかを見ることができる。

#### 「創作物」としての音楽

図4から(オ)と(ケ)は対極にある要素ととらえることができる。(オ)は『4分33秒』を人の手によって作られたものであると考えられていることに対し、(ケ)は『4分33秒』を作られたものでないと考えられているからだ。つまり、それぞれの項目は「創作」という観点に加わっているか否かで「音楽である」か「音楽でない」か、に分けられたということである。

#### 音楽の構成要素

次に同じく図4の(ウ)と(コ)を比較して考えてみたい。(ウ)は『4分33秒』を「休符」としてとらえていたことに対し、(コ)は『4分33秒』を音がない状態ととらえていた。つまりこれは、奏者が音を出さない4分33秒間を休符という音楽の構成要素としてとらえていたか、ただ音のない時間として音楽の構成要素が存在しないものとしてとらえていたかという違いである。

#### 「音楽」の意味

『4分33秒』が音楽ではないとした理由の多くに「楽しくない」「聞いていて苦痛」という意見があった。これは生徒の意識の中で「音楽」は「音」を「楽」しむものとして価値があるということである。話が若干飛躍するかもしれないが、この価値観は現代の音楽市場のあり方とも関わりがあるだろう。



### 判断の曖昧な要素

上記のものに比べ図4の(ア)無音は音楽である。(イ)静寂は音楽である。(エ)周りの音(環境音)は音楽である。(カ)無音は音楽でない。(ク)雑音は音楽でない。の5つは音楽であるか否かが曖昧である。

例えば、(ア)と(カ)は同じ「無音」に対して「音楽である」と「音楽ではない」の両方で捉えているし、(エ)と(ク)も同じ「周りの音(とらえ方によっては「雑音」)」に対しても「音楽である」と「音楽ではない」の両方で捉えている。また、(イ)の静寂に関しては(ア)や(エ)を包括した要素であると考えられる。

いずれにしても、ここにある5つの要素は生徒によって感じ方や考え方が様々であり、捉え方によっては如何様にも変容する性質を持っていることがわかる。言うなればジョン・ケージはこの曖昧な部分を『4分33秒』で刺激した、と考えられるのではないだろうか。学習を経た生徒の変容

学習を通し、生徒はどのように音楽を捉えるようになったか、ここでは、本授業を経ることで生徒の音楽の捉え方にどのような変化が生じたのかを学習プリント2の記述から分析し、考察をおこなった。

### 学習プリント2の内容

学習プリント2は本授業の5で行った「今音楽に対して思うこと」という項目である。これは授業の最後に位置づけられている内容であり、授業によって生徒の音楽に対する認識がどのように変化したのかが表れていると言っても過言ではない。型式は自由記述にした。

### 学習プリント2への記述

ここでは生徒が学習プリント2に記述したもののいくつかを紹介する。

- どこからどこまでが音楽とはいえません。その人が「音楽だ。」と思えば音楽だと思います。
- “音”に関係しているだけかがつくりだした“何か”
- 耳に入ってくる情報は全て音楽なのでは?と思います。
- 演奏する人、聴く人が音楽と思っていればよいのではないかと思う。
- 無音を聴いているのだから音楽といえると思う。
- 人が集中して耳を傾け、その人が音楽だと感じたものが、音楽になるのだと思う。
- 作曲者が自分の伝えたい事を音にあらわしたものが音楽だと思います。ただ、聴く側も自分なりに考えながら聴くでいいと思います。
- 聴こえてくる音だけでなく、無音(静寂など)にも

耳を向けている状態があれば、耳だけでなく身体で何かを感じられたら、それは音楽といえると思う。

- 私はどんなものでも心で聞けるものは音楽だと思う。
- 何かそれを通したことで学んだり、感じたり良い意味で変わったりできるもの、
- 音楽は作曲者の解釈のもとで作られたものであるなら、それは音楽だと思います。
- 人の聞こうという気があればどこでも音楽が成り立つと思います。考えてみれば、私たちの身の回りは音楽がいっぱいつまっていると感じました。
- 人がつくり出した音を楽しむことが音楽じゃないかと思います。人が少し動いたときの音でもそれを聞こうとして聞けば音楽だと思います。
- 聴覚を使うものは全て音楽である。
- 身の回りの音(クラスの声、机を運ぶ音など)も見直すことで、その中で音楽を見出せることがわかった。色々な方法で、音を楽しむことが本来の音楽に繋がると思った。
- 耳をすまして聞いているという状況があれば音楽といえるというのは、とても、私としても納得できる。
- 音楽の世界は広いなと思いました。
- 一人ひとり個性があるように音楽にも個性があるんだと思いました。
- 耳を澄まして「聴く」もの(「聞く」でない!)このことを普段、少し意識してみたい。
- 今まで音楽はCDで聞くMDで聞くものだと感じていましたが、今回の音楽を聴いて周りの全てを音楽だと感じられるんだなと思いました。

### 記述内容から見える捉え方の変化

抽出した記述から、生徒のもつ音楽の捉え方は次の内容において変化が見られたと考えることができる。

さきほど挙げたいくつかに「無音を聴く」「集中して耳を傾ける」「聴覚を使う」「心で聴く」という表現が見られた。これは『4分33秒』を紹介する際に引用したジョン・ケージの言葉「自分の音楽でも他人の音楽でも構わないのですが、その時私たちが本当に静かにしていて全員が耳をすましているという状態があればそうしたこと自体が音楽であってくれたらいいと思うのです。」という投げかけに対する答えと考えられる。何気なくしていると「聞く」という行為は受動的な意味に陥りやすい側面を持っているが、この『4分33秒』の一連の学習は生徒の「聞く」を能動的な意味での「聴く」という次元に引き上げたのではないだろうか。また、この能動的な「聴く」は次の内容にも発展したと考えられる。

音楽に参加する「聴く」

先にも述べたように多くの生徒が「聞く」という行為を「聴く」まで高めることへの必要性を感じていたといえる。つまり、音楽を能動的に聴くということであるが、同時に、その「聴き手の姿勢」をも意識し始めているのではないかと思われる。現にいくつか「人がつくり出した音を楽しむ」や「耳だけでなく身体で何かを感じられたら」、「聴く側も自分なりに考えながら聴く」といった内容の記述が見られた。これらは能動的な「聴き方」を示した記述である。つまりは音楽の中に参加していく「聴く」ということになっているのではないだろうか。

「環境音」への意識

さらにこの能動的な「聴く」はこれまでさほど気にしなかった、もしくは見逃していた(聞き逃していた)身の周りの音への気付きに結びついている。記述としては「耳に入ってくる情報は全て音楽」や「私たちの身の回りは音楽がいっぱいつまっている」、「身の回りの音(クラスの声、机を運ぶ音など)も見直すことで、その中で音楽を見出せる」等のもが挙げられる。最もそれを音楽と思うかどうかは個人の感覚に委ねられている部分があり、一概に音楽か否かに線を引くことは危険であるが、少なくとも無意識に聞いていた、あるいは聞こえていた)音の数々に意識が向かったことだけは確かである。

学習指導案「3. 目標」から見る効果

(1)の「ジョン・ケージの音楽に対する姿勢や、その音楽作品に興味を持ち、生徒ひとりひとりが音楽に対して積極的に思考することができる(音楽への関心・意欲・態度)」に関して、生徒たちは今までの彼らの中にあつた音楽という概念に当てはめにくいこの作品に対して、積極的に考えているようであり、評価に値すると考えている。

『4分33秒』を聴いた後のディベートでは、それぞれの立場から『4分33秒』について考え、学習プリントの1に意見を書いたり、ディベートの場で発表を行っていた。ある生徒たちからは「人の手によって作られた静寂はもはや音」や「曲の中の休符も音楽だということと同じで音楽であるといえる」など、ジョン・ケージの意図したことを想像しながら肯定派としての意見を上げている様子が見られた。一方、否定派は「音がないから」という物理的な理由や「音楽は音を楽しむと書くのに楽しくなかった、苦痛だった」という自身の感じ方を基に

意見を述べている生徒も多く見られた。

(2)の「ジョン・ケージの音楽表現の斬新さを感じ取り、その面白さを自分なりに言葉で表現できる(音楽的な感受と表現の工夫)」という観点においても、殆どの生徒は『4分33秒』に対して「驚きやなるほどという気持ち」を強く持ったと思われ、当初の目的を果たしたと評価できる。今まで生徒たちが音楽として接してきたものとは異質の音楽を聴き、これは音楽なのだろうかと自身で考え、意見交換する活動を通して彼らの感性を揺さぶることができたのではないかと思われる。また、クラスター奏法についてあげている生徒もいた。手のひらでピアノを弾くこと生徒たちの中では遊びでやったことがあるかもしれない。しかし、それをしっかりとした奏法として、クラスター奏法を意図的に使用した作品を作っていることを知り、様々な表現方法があることに驚いている生徒もいた。

(3)の「ジョン・ケージの音楽に対する姿勢を知ることによって、「私が考える音楽」を深めることができる(鑑賞の能力)」については、ディベートを通して仲間の意見と自身の意見を照らし合わせ、音楽に対する考えを深めていった様子が見られることを評価して良いのではないかと考えられる。学習プリントを見ると、2の欄には『4分33秒』に的を絞って考えたものが多く挙げられている。生徒たちは、「誰かが作り出した静寂」は音楽であると考えていたり、提供する人が音楽だと主張したら音楽であると考えていたり、「何でもありなんじゃないか?」と考える生徒がいたり、生徒が音楽に対して柔軟な考えを持ち始めているのではないかとと思われる。

#### 4. 授業に対する反省点

・生徒が主体となる活動を多く取り入れる

1時間で全ての学習内容を終わらせようとするあまり、生徒が主体となって行う学習活動が殆どなかった。もう少し学習者にジョン・ケージの作品を演奏させたり、『4分33秒』以外の作品について深い理解を行えるような活動を取り入れるべきであった。

また、ディベートの時間をより多くとることで、生徒間での討論をもっと深め、肯定派・否定派の意見について十分比較、理解を行うような機会を持つべきであった。各派数人の意見について、授業者が指名して意見を述べさせた程度の意見交換しかできなかったように思う。時間の配分を工夫したり、もう1時間増やしたりすることで、生徒が主体的に学習活動に取り組む工夫を行う必要があると思われる。

#### ・生徒が座る方向を一定にさせる

授業者が始め、『4分33秒』を聴かせる場所と、ディベートを仕切った場所、その時に板書する場所、などがそれぞれ変わってしまい、生徒が向く方向が一定にならなかった。生徒に注目してほしい箇所では生徒の体が別の方向に向いていて注目させることができなくなっていた。その都度授業者の方を向くように指示しても、生徒の中には頭だけ動かして話を聞くような姿や、その頭さえも動かさずに聞くような姿が見られたため、しっかり話していることを伝えるためにも生徒が目を向ける方向を、考えて授業の体勢を考えるべきであった。

#### ・適切な音量の設定

プリペアドピアノで演奏している<バッカスの祭>を聴かせた時に、音源がパソコンに取り込んだものであったため、ボリュームを最大にしても殆どの生徒が聴く事ができない小さい音量であった。CDなどでスピーカー等を利用し、生徒全員がしっかりプリペアドピアノの音色を認識することができるように準備を整えておく必要があった。

#### ・「無音」「静寂」の言葉の違い、「音を楽しむから音楽」という考え方への指導

ディベートの中で生徒が使っている言葉に「無音」「静寂」という言葉が使われていた。生徒の中では、「無音」と「静寂」について言葉の使い分けが特にされていなく、音のない状態を「無音」と表現している生徒がいたり、「静寂」と表現している生徒がいたように思われる。実際は「無音」と「静寂」では、厳密に言えば、異なる意味を持つので、ディベートの中でその言葉の違いを明確にするような指導を入れるべきであったと思われる。

また、「音を楽しむから音楽」という発言が多く見られた。これは、「音楽」という漢字を見て「音を楽しむ」と解釈して使っているのだろうと思われる。しかし、「音を楽しむから音楽」という考えをそのまま、漢字を別々に読んだものを解釈としてよいのか、疑問が残るところであった。この点についても授業者は、的確に指導を行う必要があったと思われる。

### 5. 今後の展開

他の現代音楽作品に触れ、更に音楽に対する考え方を柔軟にし、認識を広げていくことが必要だと考えられる。

ジョン・ケージの音楽作品に触れたことで、生徒たちは今まで持っていた音楽という概念が大きく変化す

ることになったと思われる。今回は、ジョン・ケージの偶然性の音楽に焦点を当て、「この作品は音楽であるのか」をディベートさせることにより考えさせた。しかし、これは現代音楽の中でも一部の作品であり、他にもたくさんの作品が存在している。それらすべてを網羅しなくても、生徒たちにもっと現代音楽に興味を持たせたり、音楽に対する考えを深めたりしていくために、他の作品に触れる活動を取り入れていくことが必要だと考えられる。

例えば、生徒が様々な現代音楽作品の中から自身の興味のある作品や作曲家について調べ活動を行って、他の生徒と共有する活動を行うことで、なかなか普段接する機会の少ない現代音楽について自分なりの解釈を持つことができるであろうし、様々な作品に触れて、音楽の幅をより広げることができるであろう。また、作曲家を絞って、その作品について深く掘り下げて調べて、その作品に対して作曲家が持っていた意図について考えることで、より深く音楽について考えることができる。

今回の授業は、生徒が現代音楽への入り口に立った程度で、「こういう音楽があったのか」「音楽をこのように捉えている作曲家がいたのか」という、彼らの感性を揺さぶるような活動であった。その揺さぶられた感性を基に、さらに現代音楽への理解を深める活動にすると効果的であろう。

本実践は「音楽って何？」を改めて見つめることをねらって行った授業であるが、もう一つ着目しなければならぬ事項があることが見えてきた。それは「聴く」ということである。授業の前半で行った『4分33秒』は音楽か否かという項目のなかで議論となった「無音（ないしは静寂、環境音）は音楽であるかどうか」で生徒はこれまで無意識であるがゆえに聞き逃していた「音」に対する意識を持った。これはこれまで受動的に捉えていた「聞く」を能動的な「聴く」に意識の中で移行したといえる。さらに、ここではジョン・ケージの『4分33秒』の作品に込めた想いを伝えることもその深化に結びついた一因だろう。

こういった能動的な「聴く」活動は、その他多くの音楽に対して感じ取り、想像し思考するといった音楽への主体的な参加に結びついてくる。音楽を感じ取ることで生まれる「緊張」や「緩和」といった感覚は音楽のどの部分で、何故起こるのだろうか。

純粹に感じ取った感覚から様々な思考を重ねていく活動、取り組みは、主体的な音楽参加によるものに他ならない。

もっともこういった意識の変化は一朝一夕で身につくものではない。根気良く授業の中に取り入れていく必要がある。しかし同時にこうした日々の取り組みが生徒の聴覚を研ぎ澄ましていくだろう。

#### 謝辞

新潟大学教育学研究科 全鋒氏には授業構築や実施で大変お世話になりました。お礼申し上げます。

#### 文献

- ・森下修次、三浦勲、清水研作 「12音技法を用いた中学校音楽における創作授業の実践」新潟大学教育人間科学部附属教育総合実践センター研究紀要「教育実践総合研究」第2号 pp. 105-116 (2003)
- ・「ジョン・ケージ」(DVD ULD-312) アップリンク
- ・John Cage 4'33"(楽譜 No.6777) C. F. Peters corp.
- ・John Cage Prepared Piano Music Volume 1 1940-47 (楽譜 No.6786a) C. F. Peters corp.  
(平成19年3月20日受理)

